

邦楽家による植民地台湾への演奏旅行

—尺八・地歌箏曲を中心に—

福田 千絵*

はじめに

本稿の目的は、邦楽家による植民地台湾への演奏旅行について、旅程、曲目、渡航の背景を検討することによって、植民地台湾における邦楽演奏旅行の特質の一端を明らかにすることである。

日本の伝統音楽の海外公演としては、1900年前後に川上音二郎と貞奴の一座が欧米で三味線や箏を演奏したのがその早い例と言える（徳丸 2004：121）。邦楽の本格的な演奏旅行としては、尺八の初代中尾都山と箏曲家の米川親敏夫妻の1915年のロシア旅行が挙げられる（福田 2006）。一方、日本の植民地の拡大とともに、外地に居住する日本人に対して演奏旅行が行われるようになった。本稿では、このうち台湾に着目するものである。

音楽家の外地への旅行については、新聞、雑誌等で数多く確認できる。その中で洋楽については井口淳子らの研究（井口 2019他）が進んでおり、植民地朝鮮の邦楽に関しては、複数の先行研究がある（山本；李 2013、金；福田 2016）。一方、台湾の邦楽に関しては、劉麟玉を中心とする研究会で継続的に調査が行われており、その中で、筆者は、箏曲家宮城道雄と尺八家吉田晴風の旅行に関して考察を行った（福田 2018a、2018b）。本稿は、その手法を用い、より多くの三曲（箏曲地歌、尺八）の演奏家を対象とし、植民地台湾への演奏旅行を考察しようとするものである。

本稿の資料としては、台湾の邦楽雑誌『台湾

邦楽界』（1933-1935）、内地の邦楽雑誌『三曲』（1921-1944）に掲載された演奏会記録や三曲家自身による記述の他、新聞、対談、伝記等を用いる。なお、雑誌の彙報欄と新聞記事の引用は、筆者不詳のため、年月日又は号数とページ番号を示す。それ以外は、筆者名、発行年、ページを（ ）内に記す。

1. 植民地台湾を訪問した三曲家

雑誌、新聞、伝記等の諸資料から、領台時代（1895-1945）に台湾で演奏旅行を行った内地の三曲家は表1に示す。

1919年から1936年までの20年間に16回、三曲家は13名を数える。この他にも三曲家の訪問は数名確認されたが、表1には知名度の高い三曲家に絞って掲載した。このうち吉田の1926年の演奏旅行は、童謡を中心としたもので、邦楽演奏会とは言えないが、吉田の後の旅行と関連するため、ここに含めた。

ここでは、演奏会の内容から、A～Dの4種類に分類した。Aは、川瀬夫妻、小野清友、山口四郎で、古典的な三曲合奏を行ったもの、Bは、宮城道雄、吉田晴風、鈴木藤枝、中島雅楽之都で、新日本音楽を中心としたもの、Cは、谷狂竹と神如道で、尺八古典本曲の独奏を中心としたもの、Dは、上田兄弟、初代中尾都山で、尺八上田流と尺八都山流の家元によるものである。

*お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所
研究協力員

表1. 植民地台湾を旅行した三曲家 (福田作成)

年月	演奏家名	種目と流派	分類
1919年10~12月	川瀬順輔 川瀬里子	琴古流尺八 生田流箏曲	A
1924年1月	宮城道雄	生田流箏曲 新日本音楽	B
1925年5月	小野清友	生田流箏曲	A
1926年2月	吉田晴風 本居長世	琴古流尺八 童謡作曲家	B
1926年10~11月	川瀬順輔 川瀬里子	琴古流尺八 生田流箏曲	A
1928年3月	谷 狂竹	明暗流尺八	C
1930年2月	上田芳幢 上田竹童	上田流尺八	D
1931年6月	吉田晴風	琴古流尺八 新日本音楽	B
1932年1月	中尾都山	都山流尺八	D
1933年1~3月	鈴木静枝	琴古流尺八	B
1933年10~11月	吉田晴風	琴古流尺八 新日本音楽	B
1934年3~4月	山口四郎	琴古流尺八	A
1934年9~10月	神 如道	琴古流尺八 錦風流尺八	C
1935年7~8月	宮城道雄	生田流箏曲 新日本音楽	B
1935年10~11月	山口四郎	琴古流尺八	A
1936年3月	中島雅楽之都	生田流箏曲 新日本音楽	B

2. 演奏旅行通覧

ここでは、表1の來台演奏旅行について、A~Dの三曲家別に、略歴、來台時期、同伴者、旅行日程及び演奏場所、曲目、その他（発起人、反響等）について検討する。

A. 古典的な三曲合奏を中心とした演奏旅行

(1) 初代川瀬順輔、川瀬里子夫妻

初代川瀬順輔（1870-1959）は山形県出身の琴古流尺八家。初代荒木古童（竹翁）、上原六郎に学んだ。東京に道場を開き、楽譜の普及に努め、主宰した竹友社は、琴古流最大の会派となった

（上参郷 1989a）。吉田晴風、鈴木藤枝、山口四郎も弟子であった。朝鮮、満州も訪問した。

川瀬里子（1873-1957）は、熊本県出身の地歌箏曲家。熊本の長谷幸輝に地歌三味線、吉田久子に名古屋系の箏組歌を学んだ。現在も広く使われている改良型の地歌三味線を考案した。1947年里心会を結成した。（平野 1989c）

【來台時期】

1回目は、1919年10月26日以前に到着、12月4日以降に離台。2回目は、1926年10月9日渡台、11月6日以降に離台。

【1回目の旅程】

1919年11月8日及び9日台北鉄道ホテル余興場にて歓迎会。11月16日台中俱樂部¹。12月4日基隆公会堂²。11月8日及び9日の歓迎会は、もともと10月26日に予定されていたが³、明石台湾総督の深刻な病状を受けて延期し、2日間に変更したものであった⁴。

【1回目の曲目】

1919年の旅行では、歓迎演奏会の予定が変更され、当初から2週間後に2日間行われたが、その際、曲目も変更になった。当初の曲目は下記の18曲で、すべて古典的な三曲合奏であった。

「秋之曲、さらし、夕顔、青柳、若菜、残月、里之暁、酒、楫枕、萩之露、松竹梅、雪、さむしろ、茶湯音頭、夜々之星、深山獅子、八重衣、けしの花」（『台湾日日新報』10月22日7面）

2週間後2日間の日程では下記のように変更された。番組中冒頭の《本曲》は、尺八古典本曲と思われる。その他は、箏三味線と合奏する三曲合奏であった。2日とも12曲ずつで、重なる曲はなく、意欲的なプログラムであったと言えよう。

8日「本曲 末之契 夕顔 残月 酒 浮船 松竹梅 雪 さむしろ 夜々之星 深山獅子 青柳」

9日「本曲 けしの花 秋 里之暁 楫枕 萩之露 千鳥 若菜 茶湯音頭 新娘道成寺 八重衣 七小町（午後六時開会午後十時半終の見込）」（『台

湾日日新報』10月26日7面)

番組中の《雪》については、台北の尺八家長尾景徳による期待の文章が新聞に掲載され(『台湾日日新報』10月26日7面)、川瀬順輔が演奏会前に、「長尾氏が雪の曲を天下一品と称賛せられたる結果、各方面より同曲に対し多大の期待を囑せらるるに至つた」とし、曲の難しさを説き、期待に添えるかどうか不安(『台湾日日新報』11月8日4面)であると応えている。

【1回目の発起人、反響】

「当地斯界の同好者発起となり今回来遊」(『台湾日日新報』10月22日7面)とあるので、台湾の三曲同好者が招いたことになる。台中の演奏会に関しては、「さすが我国における斯道第一級の名人」「近來になき盛會を呈せり」(『台湾日日新報』11月19日4面)と称賛されていた。この川瀬夫妻の1回目の訪問は、後に台南の尺八家によって、「台南に於ける琴古流大会は大正八年川瀬先生の來南以來大々的なものはなかつた(南部1926)」と回想されている。在台尺八愛好家にとって本格的な尺八家の演奏に接する貴重な機会であり、印象に残る訪問となったようである。

【2回目の旅程】

2回目の旅行の同伴者は、井村豊子(1900-1996)(後の阿部桂子)であった。井村は、上京後、川瀬里子に師事し、1931年に独立し、銀明会を主宰した(平野1989a)。

全体の旅程は、1926年10月9日に神戸を出発し、台北、基隆、台中、嘉義、台南、屏東、高雄という全島を回り、11月半ばに台湾を離れた⁵。なお、台湾の主な都市の位置関係については、稿末の図1を参照されたい。

演奏会は次の2回の実施が確認できた。

10月31日嘉義座にて三曲演奏大会⁶。この予告記事は、新聞の漢文版に掲載されていた。

11月6日屏東座にて川瀬一行歓迎竹風会。『三曲』には、出演として、川瀬夫妻、井村豊子の他、上津と鈴木という名が見える(『三曲』1926年12

月号67頁)。

【2回目の協力者、反響】

旅行全体の招聘については不明であるが、嘉義においては嘉義竹友会、屏東では竹風会という尺八の会派が演奏会を主催していた。

(2) 小野清友

小野清友(1883-1944)は、岡山県出身の生田流箏曲家。福田絹寿に地歌箏曲を学び、関西音楽指針会を結成。音楽学校も開設し、日本箏曲家連盟の結成にも尽力した。(平野1989b)

【來台時期】

1925年5月16日以前に到着、5月23日以降離台。

【旅程】

1925年5月16日、台南市公会堂にて歓迎演奏会(『三曲』1925年6月号)。

5月23日台北の台湾日日新報本社3階にて三曲演奏会(『台湾日日新報』5月23日5面⁷)。この会は、『三曲』では歓迎演奏会とされており、台北で活躍していた箏三弦の船田喜久、夫で都山流尺八の船田基山、琴古流尺八の中山勇次郎が出演した(『三曲』1925年6月号54頁)。

【目的、発起人】

新聞記事によると、「台湾に於る邦楽視察の爲め來台した」という(『台湾日日新報』5月23日5面)。弟子が台湾に移住し、教授を始めたのに伴い、師匠として視察に行ったということであろう。後述する、1930年の上田芳懂、1936年の中島雅楽之都と類似の事例と思われる。

5月16日の演奏会は、『三曲』記事から、台南の都山流尺八の水原秋山主宰の紅葉会の主催とみられる。5月23日の三曲演奏会は、「台北の箏絃界有志発起となり」開催された。

(3) 山口四郎

山口四郎(1885-1963)は、神奈川県出身の琴古流尺八家。初代川瀬順輔に学び、1921年に独立して竹盟社を結成した。(上参郷1989e)

【來台時期】

1 回目は、1934年3月17日基隆着、4月15日以降離台。2 回目は、1935年10月初旬到着、11月24日以降離台。

【1 回目の旅程】

1 回目の旅行の同伴者は、地歌箏曲の加賀見文雄、櫻場美和子⁸、「三月中旬以来台湾旅行四月末帰京（『三曲』1934年5月号77頁）」ということであった。

1934年3月19日台北でラジオ放送に出演し、その後、新竹、基隆、台南、台中、高雄を巡演した（『三曲』1934年5月号75頁）。台北の尺八家青木繁による『三曲』の記事に、台中までの演奏会場が詳しく記されている。「演奏会としては台北帝大学寮、警察官練習所、警察協会台北州支部慰安会、第一師範学校、一般公開としては台北警察会館、基隆公会堂、新竹公会堂に於て、更に新営、虎尾を終えて、今この台中（青木 1934：29）」。

4月9日台北の警察会館にて演奏会（『台湾日日新報』4月3日2面）。『三曲』には「歓迎琴楽会」と表記されており、出演は、山口四郎、加賀見文雄、櫻場美和子、琴楽会会員であった（『三曲』1934年5月号73頁）。琴楽会は、「台北の箏曲界の有志により組織されている」会で、この日は、山田流箏曲家松本多喜栄とその社中、生田流箏曲の坂上博子が出演した（『台湾邦楽界』10号22頁）。

4月15日台中市新富小学校にて山口四郎師一行歓迎演奏会が行われた（青木 1934：26）。

【2 回目の旅程】

2 回目については、3 回の演奏会が確認できた。

1935年11月11日基隆公会堂（『台湾日日新報』11月10日5面）。

11月23日台北市博覧会第二会場にて台湾邦楽三曲協会演奏会。山口四郎の他、協会員も出演した（『三曲』1935年12月号63頁）。台湾博覧会は始政40周年を記念し、1935年10月10日から11月28日まで台北市で開催された。第二会場とは、台北市新

公園であった（甲府市庶務課 1936：3）。会場内には、90坪の音楽堂、330坪の演芸場が設けられていた（前掲書6頁）ので、そのような施設で山口の演奏会が催されたと考えられる。

11月24日台北市警察会館にて台湾三曲協会邦楽三曲鑑賞会。出演は、山口四郎の他、台北の琴古流尺八家である若松掬尤、佐藤晴美、山田流箏曲の松本多喜栄他であった（『三曲』1935年12月号63頁）。

以上のように、演奏会が確認できるのは11月に入ってからであるが、「十月初旬より台湾各地へ旅行中」（『三曲』1935年11月号66頁）とあるので、十月初旬には來台していたとみられる。

【協力者】

1 回目は、「台北教育会館別館を根拠としまして、全島行脚の実行計画が、各地三曲家の御援助に依り樹立せられ、台北では三曲家を招待したり、又台湾三曲協会設立発起人會に此等お迎えしたり（青木 1934：29）」とされており、全島を挙げて三曲家の協力があつたとみられる。台中では、琴古流の宮本信一、関段敏雄、小川平次郎、木原彩竹の尺八各氏、箏の日吉多満代、新富女子青年団の尽力もあつた（青木 1934：29）。2 回目も、台湾三曲協会の協力があつた。この協会は、「発会四月三日 発起人百余名」で創立した「台湾邦楽三曲協会（『三曲』1935年4月号81頁）」と同一であろう。山口は、1 回目の旅行の際に発起人に署名し、2 回目の旅行では協力を受けたものと思われる。

B. 新日本音楽を中心とした演奏旅行

(4) 宮城道雄

宮城道雄（1894-1956）は、兵庫県出身の生田流箏曲、地歌の演奏家。中島検校に師事し、10代を朝鮮で過ごした。1918年に上京後、新日本音楽を牽引した。東京音楽学校教授。十七弦箏や大胡弓などの楽器開発も行った。（上参郷 1989d）

【來台時期】

1 回目は、1924年1月6日到着、1月18日以降29日以前に離台。2 回目は、1935年7月22日到着、8月14日離台。

【1 回目の旅程】

1 回目の同伴者は、宮城貞子夫人（1889-1968）、牧瀬喜代子（1905-1991）、牧瀬数江（1912-2005）、野村景久（1888-1935）であった（吉川 1962：339-345）。

1924年1月2日神戸発、1月6日基隆着（吉川 1962：340、『台湾日日新報』1月7日2、3面間）。この來台に先立ち、新聞記事には大きな期待が寄せられており（前掲誌1月1日7面、前掲誌1月7日2、3面間等）、最初の訪台前に既にかかなりの知名度があったことが伺える。

1月13日には、最初の演奏会が基隆座で開催された。この演奏会は、下記の新聞記事にあるように、もともと9日及び10日に基隆公会堂で予定されていたが延期になったものである。また、基隆滞在中の追分節見砂東楽師も出演し、田邊尚雄の開発した玲琴を奏することも記されている（前掲誌1月7日2、3面間）。続く13日の記事では、三曲十数曲に加え、朝鮮昌徳宮徳恵姫御作の童謡の特別番組及び正調追分節数曲が予定されていた（前掲誌1月13日7面）。

1月16日～18日に台北鉄道ホテル余興場にて台北盲啞学校の基金募集のための箏曲大演奏会が開かれた（前掲誌1月13日7面）。

以上のように、1 回目の旅程は、1月6日に到着後、13日の歓迎会と16～18日の演奏会しか明らかではない。後日、宮城自身が「正月の一ヶ月、台湾に行った（宮城；吉田 1951：70）」と述べているが、一行は1月29日に福岡で演奏会を開催している（吉川 1962：344）。これは、台湾からの帰途であると考えられるので、実質は3週間程度の滞在だったと思われる。

【1 回目の渡航理由及び台湾側の期待】

1 回目の旅行は、1922年に台湾総督府の援助で

台湾の音楽調査を行った田邊尚雄が、1923年9月の関東大震災後に、宮城に勧めたのが発端だった。田邊が基隆の衛生病院長中村護に依頼し、総督府からも招聘を受け、実施された（吉川 1962：339-340）。中村護は、新潟出身で、基隆の養浩堂医院の院長であった（唐津 1937：158）。

渡台に関連する下記の2つの記事からも、基隆の中村護、田邊尚雄の仲介によることが明らかである。「基隆病院中村院長の奔走で宮内省雅楽部田邊氏の紹介に依り我国笙楽界の名人宮城道雄氏が正月六日着船で渡台する事となり（『台湾日日新報』1月1日7面）」「一行の來台は基隆の好楽家中村護氏の斡旋で本島には馴染の宮内省雅楽部講師田邊理学士の紹介によるものである（前掲誌1月7日2、3面間）」

個別の演奏会にも後援が付いていた。1月13日の基隆の演奏会は、中田司令官、遠藤郡守、山内街長、顔國年の4氏が主催となること、基隆夫人会が後援となることが報じられていた（前掲誌1月7日2、3面間）。主催者の一人である顔國年は、基隆の台湾人実業家であった（林 1929：98）。1月16日～16日の演奏会は、「台湾教育会及び武藤台北市尹の後援であった（『台湾日日新報』1月13日7面）」。

【2 回目の旅程】

2 回目の同伴者は、宮城貞子夫人、宮城よし子、宮城喜代子、宮城数江、鶴川（箏屋）の店員であった（吉川 1962：561-568）。新聞等においては、箏屋を除いて、「一行五名」と記されている（『台湾日日新報』7月20日11面）。

2 回目の旅行も、「数多き宮城ファンにとつては絶好の機会なので、いずれも心から氏の來台を待ち侘ている（前掲誌7月16日7面）」「全島各地にて神技公開を待ちわびている（前掲誌7月23日7面）」など期待されていた。

1935年7月22日基隆到着（前掲誌7月22日2面）。7月27日、28日台北の榮座で演奏会（前掲誌7月26日2面、7月28日11面）。当初、曲目は

次のように決まっていた。「御代の祝、櫻変奏曲、歌謡曲、春の海、童曲三題、和風楽、水の変態、萩の露、うてや鼓」(前掲誌7月23日8面)しかし、前日の新聞になると、曲数が増えていた。「御代の祝、落葉の踊、歌謡曲春の海、童曲、瀬音、春陽楽、萩の露、うてや鼓等(前掲誌1935年7月26日2面)」最後の2曲は古典的な三曲合奏で、それ以外は宮城の新様式の作品であった。

7月30日基隆劇場(前掲誌7月23日8面)。これに関しては、新聞の日本語版だけでなく漢文版にも掲載されていた⁹⁾。

8月1日台中娛樂座、8月3日台南宮古座、8月4日高雄青年會館、8月5日屏東末広座、8月6日嘉義座、8月7日明治製糖麻豆工場、8月8日大日本製糖虎尾工場、8月9日塩水港製糖新営工場、8月11日阿里山登山。8月12日台北ラジオ放送。8月14日台湾発。(吉川1962、東1935、『台湾日日新報』7月26日2面)

【2回目の招聘者】

2度目の訪台も、中村護が呼び寄せたものであった。宮城自身が、「十二年前一度来たことがあります。今回も中村護先生から久し振りに来んかとのことでやつて来ました」(『台湾日日新報』7月23日7面)と述べている。伝記では、「民間の同好者による招き(吉川1962:340)」とされており、これは中村と彼の関連団体のことと思われる。来台前の記事から、「台湾に於ける精神病患者救済会を助成するため」に来台し、「台湾教育会、愛国婦人会台湾本部、台湾婦人慈善会」が後援となったことが分かる(『台湾日日新報』7月16日7面)。また、宮城自身の発言からも、「教育会及び精神救済会等色々の会の招待で全島を演奏行脚する(前掲誌7月23日7面)」と述べられている。宮城の旅行の場合、社会福祉団体からの後援が多いことが一つの特徴となる。

なお、宮城は、台湾の風土にも関心を向けていた。阿里山に登り、「阿里山の気分を出す新曲を作りたい(前掲誌7月20日11面)」と抱負を述べ

ている。また、「台湾在来の音楽は支那から来たものか或は台湾で生れたものかこれを調べて経路を明かにする事も面白いし、余り知られていない台湾の音楽を取り入れて作曲するのも楽しみの一つです」「演奏会の暇々には各方面の音楽を悠くり調べたい(前掲誌7月23日7面)」とも述べている。

(5) 吉田晴風

吉田晴風(1891-1950)は、熊本県出身の琴古流尺八家。琴古流の鳥井若菜に学んだ。朝鮮で宮城道雄に出会い、新日本音楽の尺八家として活動し、アメリカ、朝鮮にも旅行した。(月溪1989c)

【来台時期】

1回目は、1926年1月25日出発、2月26日帰国(藤田1962:159)。2回目は、1931年6月5日到着、30日離台。3回目は、1933年10月2日到着、11月3日離台。

【1回目の旅行】

1回目の同行者は、本居長世(1885-1945)。三曲ではなく、童謡、唱歌、舞踊の公演であった。吉田は1919年に本居長世の尺八入りの作品を演奏するなど(金田一1982:159-160)、台湾旅行前から親交があった。招聘者は、台中で童謡と舞踊運動を行っていた日高紅椿であった(前掲書288頁)。

【2回目の旅行】

2回目の同伴者は、吉田恭子夫人(1889-1970)、養女の千葉富子、舞踊家の坂東三津美。夫人は箏三味線、千葉は歌という役割であった。

1931年6月2日神戸発、門司から基隆までは賀陽宮と同船で、船中で御前演奏を行ったという。6月5日に基隆着。日の丸会館に宿泊。台北の警察会館で邦楽連盟の歓迎座談会が催された。邦楽連盟は、「此度新たに私を迎えるために始めて出来た会であつて、流派を超越したる三曲家を始めとし、他の邦楽家の主なる方々を網羅し、洋楽家、邦楽に興味を持たるる人、各新聞社を代する人々

にて約五十名参集（『三曲』1931年8月号63頁）した新設の団体であった。

6月6日～8日台北警察会館にて演奏会。この演奏会が警察会館の舞台開きでもあった。警察会館の設計を友人の北川義雄（竹名綾風）が行っており、吉田の演奏会がこけら落としであった。

6月9日樺山小学校及び日の丸会館にて講習会。6月11日新竹座、13日及び14日学生向け及び一般向け2公演を2日。6月15日知事官邸にて賀陽宮御前演奏、6月16日新営の塩水港製糖会社本社、6月18日台南劇場2公演、6月19日嘉義公会堂、6月20日高雄女学校及び高雄館、6月21日屏東座、6月23日彰化女学校、6月24日基隆座、6月25日台北日の丸会館にて帝大法学部の会に出演、6月27日台北にて最終演奏会。6月28日台北ラジオ放送出演。6月30日台北発。（『三曲』1931年8月号62-64頁、9月号64-66頁）

【2回目の旅行の招聘者】

旅行に際し、事前に「台湾総督夫人や警視総監夫人より木下長官を始め各名流の方々に宛て依頼と紹介があつた（『三曲』1931年8月64頁）」という。台北では、新設の邦楽連盟の歓迎を受け、台北の3日間の演奏会では、邦楽連盟の会員が助演を務めた。現地での案内は、台北の北川義雄（綾風）、及び台中の小川平次郎（浄童）が務めた。

なお、吉田は後述するように尺八の普及に熱心であり、2回目の来台の翌月には、弟子の佐藤晴美を台北に派遣した。（前掲誌76頁）

【3回目の旅程】

3回目の同伴者は、吉田恭子夫人、千葉早智子（旧名富子）、舞踊家の永濱咲子であった。千葉は、2回目の旅行の後、改名して女優に転身したが、この旅行には同行した。

1933年10月2日台湾着、10月3日及び4日台中新富小学校にて女学生・小学生向け講習会、10月5日屏東女学校、屏東小学校、末広座、10月6日屏東の恒春小学校、10月7日台湾製糖旗山工場、10月8日台湾製糖東港工場、10月9日台湾製

糖後壁林工場、10月10日高雄青年会館、10月11日台湾製糖橋仔頭工場、10月12日台湾製糖車路乾工場、10月13日台湾製糖三嵌店、10月14日台南公会堂、10月15日台湾製糖湾里工場、10月16日嘉義公会堂、10月18日塩水港製糖岸内工場、10月19日明治製糖麻豆工場、10月20日明治製糖南靖工場、10月21日彰化女学校・豊原小学校、10月22日明治製糖南投工場、10月23日明治製糖溪湖工場、10月24日新竹小学校にて女学生・小学生向け。10月25日台北ラジオ放送出演。10月26日～29日台北警察会館。10月31日及び11月1日花蓮港小学校。（『三曲』1933年11月号63-65頁、12月号52-53頁）

曲目について述べておく。ラジオ放送では次の3曲を演奏した。《瑞竹の唄》《青き葡萄の歌》《童曲 畑のとんぼ》。独唱千葉早智子、伴奏吉田恭子、尺八吉田晴風。《海》尺八吉田晴風、伴奏吉田恭子。（『台湾邦楽界』7号27頁）この他、2回の曲目が明らかである。台中の演奏会曲目「祈り、春の唄、秋の調、章魚つき、小鳥の唄、小川のほとり、山路、遠砧、海」。台北での演奏会曲目「瑞竹の歌、青き葡萄の歌、海、畑のトンボ、越後獅子、汐くみ、娘道成寺」。このうち《瑞竹の歌》は、1922年に当時の皇太子（後の昭和天皇）が台湾製糖を訪れた際のエピソードを元にした歌である。1933年に作曲され、翌年、レコードが発売された。その曲を吉田夫妻の尺八と箏あるいは三味線で演奏し、千葉が歌ったと思われる。その他、吉田や宮城道雄の新様式の作品を演奏した。ただし、台北での最後の3曲が古典的な三曲合奏であったのは、観客や共演者を考慮したためかもしれない。

【3回目の旅行の招聘者】

この旅行は、台北好楽家協会の設立第1回事業であった。台北好楽家協会は、台北の超流派の三曲家の団体である（『台湾邦楽界』6号12頁）。吉田は台湾旅行直前に全米演奏旅行を遂行していたが、この企画は、吉田のアメリカ帰朝歓迎も兼ねていた（前掲誌同頁）。また、吉田自身の記事によると、事前に「文部省から台湾総督府文教局宛

に依頼状を出して貰ったために全島、台湾教育会の主催及後援となつた」という。それに加え、「台湾製糖会社、明治製糖会社の在京重役と万端の打合せが出来たために」台湾製糖9工場と明治製糖4工場も日程に加えられた（『三曲』1933年12月号52頁）。以上の経緯を総合すると、吉田のアメリカからの帰朝、協会の記念事業が重なり、さらに、吉田から文部省に働きかけ、台湾側の準備がなされたということになる。

なお、渡台直前に、吉田は大阪の尺八家らに対し、「私は日本男児は須らく尺八を吹くべしといふ旗しるしの下に、先以て日本中に尺八普及運動を起す、これから大に種蒔きを始めますから、収穫は皆さんでやつて頂きたい。これからの仕事はこれです（『三曲』1933年11月号63頁）」と述べたという。この時、大阪で歓迎交換会が行われ、琴古流、都山流、上田流、竹保流他、流派を超えた尺八家が一同に会し、吉田は、「日本の尺八界もかくの如く進まねばならぬ（前掲誌同頁）」と感慨深く述べている。この吉田の思いが台湾旅行の原動力となっていたとも考えられる。

(6) 鈴木静枝

川瀬順輔に師事した女流尺八家。日本女子大学出身で、武術にも優れていた。1924年頃、尺八家として活躍した後、1928年から1932年まではヨーロッパでチェロを学ぶ傍ら、洋楽曲を尺八で演奏する活動も行っていた。1933年9月には朝鮮も訪問した。（『朝日新聞』1932年11月1日9面、『三曲』1932年9月号79頁）

【來台時期】

1933年1月26日到着、3月17日帰京。

【旅程】

1933年1月23日東京発（『三曲』1933年2月号66頁）。1月26日台湾着（『三曲』1933年3月号61頁）。2月3日台中座にて鈴木藤枝女史歓迎台中琴古会、出演は鈴木藤枝の他、琴古流の宮本信一、関段、木原彩竹、小川浄童らであった（『三曲』

1933年3月号72頁）。「殆ど満員の状態を示し先づ盛会（木原1933：62）」であった。2月4日には講演も行い、好評であった¹⁰。2月5日高雄へ出発した（前掲誌同頁）。2月11日屏東小学校講堂にて鈴木女史歓迎演奏会（櫻風会新年会）（『三曲』1933年3月号72頁）。2月13日新竹公会堂にて鈴木女史歓迎演奏会（前掲誌同頁）。2月15日台北市警察会館にて鈴木女史音楽会。「櫻風会のお歴々が主催」（木原1933：61）したものであった。3月17日帰京（『三曲』1933年4月号63頁）。

【招聘者、衣装、宿泊】

櫻風会（現在は桜楓会）は、日本女子大学の同窓会であるので、母校の卒業生に招かれたと考えられる。一方、台中琴古会は、1933年春に成立した尺八団体で、「琴古流愛好家を以て組織し斯道に貢献せんとする会」とし、発起人は、小川浄童、木原彩竹、宮本梅林、関段敏男の四氏であった（『三曲』1933年3月号75～76頁）。木原は、台中での鈴木の珍道中を『三曲』に寄稿しているが、その中に登場する「全島マネージャーの小川さん」（木原1933：61）とは、小川浄童のことであろう。小川は、吉田晴風の旅行でも案内役を担っていた。

女性の尺八・チェリストという異色の音楽家は、尺八の時には和服、チェロの時には洋装に着替えたという。「鈴木さんも仲々忙しい尺八を吹く時は日本服、セロは洋装又は支那服と殆ど一曲置き位に着換えて出演していた（木原1933：62）」

(7) 中島雅楽之都

中島雅楽之都（1896-1979）は、京都出身の生田流箏曲、新日本音楽の箏曲家、作曲家。本名は中島利之。1913年正派生田流（のち正派邦楽会）を興した。一時期、成和音楽会を結成し、新日本音楽運動を推進した。（平野1989d）

【來台時期】

1936年3月5日基隆着、3月13日離台。

【旅程】

1936年3月2日神戸出発。当初2月29日出発の予定が船の欠航のため延期となった。待機中に水原秋山及び林黎山と遭遇。本来は29日の船で落ち合う予定であった。

3月5日基隆着、水原夫人、石鳥夫妻等の出迎え。中村博士夫人にも迎えられた。

3月6日台北放送に出演。自作の《お七吉三》を「三絃 中島雅楽之都、箏 喜多村雅楽緒 尺八 水原秋山（中島；吉田1996：442）」で合奏した。喜多村は、北村雅楽緒のことであろう。中島と弟子の合奏に、台北の都山流尺八家水原が加わった合奏であった。今回の旅行で中島の演奏が確認できたのは、この放送だけであった。

3月8日台南へ移動。中島ら3名、水原夫人、北村宅へ内弟子に入る予定の長谷川簫光が彰化から台中を経て同行。櫻井、岩本、内藤3氏の厚意で「銀水」にて歓宴を催された。3月10日車路範製糖所長佐藤覚一氏の案内で、水原夫人、北村雅楽緒と共に歓宴を催され、製糖所を見学し、3月12日に台北に戻り、3月13日に離台した（中島；吉田1996：443-444）。この後、北村、吉田、長谷川の3名が台南の稽古場で箏三弦の指導に当たることになっており、旅行中に、稽古場の近くの住居を探した（中島；吉田1996：443）。

【渡航理由】

この旅行は、弟子の北村雅楽緒及び吉田雅楽鳳が派遣講師として台湾へ向かうのに同行したものであった（中島；吉田1996：441）。

C. 尺八古典本曲を中心とした演奏旅行

(8) 谷 狂竹

谷狂竹（本名武雄）（1882-1950）は、大阪出身の尺八家。宮川如山に師事し、後に破門される。虚無僧行脚と称し、全国、朝鮮、満州、上海、香港、インド、東南アジア各国、ハワイを周遊した。（月溪1989b）1933年から5年間、台北に定住した。

【來台時期】

1928年3月

【旅程】

下記の2つの記事によると、3月に渡台し、琉球を経て9月26日に帰京したことになる。この後、谷は、1933年から5年間、台北に滞在し、台湾三曲界から歓待を受ける。しかしながら、1928年の旅行については下記の記事のみで、詳細は不明である。

「台湾全島一巡の予定にて虚無僧行脚修行中」
「三月初旬出発、渡台」（『三曲』1928年4月号76頁）
「台湾琉球虚無僧行脚を終へ去廿六日夜突然帰京」（『三曲』1928年10月号78頁）

(9) 神如道

神如道（1891-1966）は、青森県出身の尺八家。三浦琴童に琴古流、折登如月に錦風流を学んだ（上参郷1989d）。全国各地の尺八古典本曲を収集し、講習や演奏を行った。その一方で、多孔尺八の開発も行っていた。

【來台時期】

1934年9月10日到着、11月3日帰京。

【旅程】

1934年9月5日に出発し、10日に基隆に到着した。総督府を含め、各学校、官署会社工場、民間へ公演と講習が数多く予定され、当初の予定は、9月13日に台中に移り、南部各地を巡演し、10月1日に台北に戻り、10月9日前後に帰京することになっていたが、10月下旬に延期された¹¹。

9月11日には挨拶回りで台湾総督及び各局長に面会した¹²。9月12日には、総督府の食堂で独奏会を開催し、大勢の観客を前に吹奏したという¹³。曲目は、尺八古典本曲であった。

9月15日台中市日の本にて神如道氏を聞く夕。司会は関段敏雄（『台湾邦楽界』14号25頁）。

10月5日には総督邸に招待を受け、琴古流の佐藤晴美と本曲を演奏した¹⁴。曲目は、「一、鈴慕 二、鹿の遠音、三、松風、四、瀧調べ」（『台湾邦楽界』

13号23頁)の4曲であった。

10月6日には、美風会主催、銀玲会と谷狂竹の後援で謹聴会が催された¹⁵。曲目は、「残月、松風、虚鈴、三谷」(『台湾邦楽界』14号22頁)の4曲。前半2曲は合奏、後半2曲は本曲と思われる。銀玲会は地歌箏曲の団体であるので、普段は本曲中心の神も三曲合奏を楽しんだのであろう。

10月7日台北市警察会館にて神如道師歓迎謹聴会(前掲誌24頁)。司会は佐藤晴美、出演は神如道、谷狂竹他であった(『三曲』1934年11月号68頁)。

10月21日花蓮港公会堂にて「神如道を聞く夕」が、竹秀会、琴古会の合同の主催で行われた。司会は野田秀月。20日夜及び21日昼間に講習会。午後6時30分より午後10時終了。曲目は、「松風、虚空、三谷、箏の露で三曲合奏、新娘道成寺、未の契、六段」(『台湾邦楽界』17号26頁)記事にもあるように、箏の露以降の4曲は合奏、最初の3曲は古典本曲で尺八独奏であった。

最終的に、「二ヶ月四五回の古典本曲公演講習(『三曲』1934年12月号76頁)」を行なったという。
【紹介者、反響】

誌上では早くから神如道の來台が報道され、「古典本曲の大家 神如道氏來台」「さだめし來台の暁には三曲同好者には何か新しいショックを植えることであらう。本社は一夕歓迎茶話会を開催同師の尊い御高見を拝聴したいと思つている。」(『台湾邦楽界』12号23頁)など、期待が大きかった。また、「同師は山陽北九州を経て八月朝鮮を巡り九月十日頃來台する予定である事を本社へ通信があつた」「総督、文教、内務、警務各局長に有力なる紹介状も最早発送された事なれば來台は殆ど確定的のものである。(前掲誌23頁)」とあるので、自ら台湾の有力者に連絡を取っていたことが伺える。

D. 尺八各流派の家元による旅行

(10) 上田芳憧、上田竹童兄弟

上田芳憧(1892-1974)は上田流の創始者。大

阪出身。上田竹童(1895-1986)は弟で上田流幹部。芳憧は、初代中尾都山に学び、都山流の最高職格まで進んだが、1917年に独立して開流。その後、五線譜や多孔尺八も使用した。(月溪 1989a)

【來台時期】

1930年2月16日～2月27日離台の予定

【旅程】

1930年2月16日の便船で來台。京楽座にて2月18日馨友会主催歓迎演奏大会。司会は三村馨南。上田竹童による秘曲《鶴の巢籠》を含む22曲。「屏東まで各地を演奏」し、2月27日の便船で帰阪の予定(『台湾日日新報』2月18日)。なお、京楽座は、栄座が一時改名していた共楽座と思われる。(ウェブサイト『臺灣老戲院文史地図(1895-1945)』参照)

【その他、招聘者】

歓迎会は馨友会主催。來台は、三村馨南が呼び寄せたとされる。三村馨南は、「僅か数年足らずに全島の普及し且その間家元の上田芳憧上田竹童の兄弟迄も台湾に足跡を残さしめた(『台湾邦楽界』創刊号10頁)」として知られていた。

(11) 初代中尾都山

初代中尾都山(1876～1956)は、大阪出身の尺八家。都山流を1896年に創始。1915年にロシア旅行、朝鮮、満州旅行。1932年台湾、琉球旅行。(上参郷 1989c)

【來台時期】

1932年1月5日基隆着、1月23日帰京。

【旅程】

同伴者は、井上黄山と橋本暁山(都山流百年史編纂員会 1998: 882)。

1932年1月2日渡台、1月6日台北特別講習会、1月7日台湾特別講習会、1月10日台南特別講習会、1月17日及び18日台北にて臨時准師範検定試験(『都山流百年史』1998: 832～833頁、882頁)。新聞によると、1月5日來台、鉄道ホテルに宿泊(『台湾日日新報』1月6日2面)。1月16日基隆

より来北、鉄道ホテルに宿泊（『台湾日日新報』1月17日1面）。『都山流百年史』には、1月7日台北市教育会館にて臨時准師範試験という記述もあるが、新聞の情報と合わせると、試験は17日及び18日に実施されたとみられる。

判明している会は以上であるが、「台北、高雄、台南、嘉義、基隆等で演奏会、講習会を開催、同月二十三日帰京（都山流百年史編纂委員会1998：882）」とあるので、全島を巡演したことが分かる。

【その他】

中尾は全国を周遊し、講習会と検定試験を行っていたので、台湾旅行もその一環であったのであろう。1930年以降、演奏活動は行っていないため（田中1989）、台湾でも自らは吹奏しなかった。

3. 考察

以上、内地の三曲家の旅行について、旅行者、同伴者、旅程、会場、曲目、渡航の経緯と理由を検討した。ここでは、旅行の傾向について、項目ごとにまとめていく。

まず、旅行した三曲家の多くが、他の植民地、すなわち朝鮮、満州、樺太を訪問し、内地でも精力的に全国を周遊していた。『三曲』の彙報欄を見ると、内地の各地を訪れる三曲家は多かったが、朝鮮や台湾という外地まで足を伸ばす三曲家は限られていた。台湾を訪問した三曲家は、比較的フットワークが軽かったといえるだろう。国内周遊の背景には、各地の弟子からの招待、会派の勢力拡大や視察等の目的があり、台湾旅行もその延長であったと考えられる。

来台に際し、単独で訪問したとみられるのは、谷狂竹、神如道であった。上田芳懂と竹童は尺八の2人であり、中尾都山は弟子の尺八家2名を帯同していた。その他、川瀬夫妻、山口四郎、吉田晴風、宮城道雄は、箏三弦の合奏が可能になるような同伴者を伴っていた。中島雅楽之都是、演奏のためではなかったが、同行者がいた。

旅程について、共通の行程が見出された。神戸から乗船し、数日で台湾の基隆港に到着し、当日または翌日に台北へ移動するというのが定番で、基隆で演奏会や歓迎会、座談会を行う場合もあった。全島巡演の場合には、台中、台南方面へ汽車で移動し、巡演の初めか終わりのどちらかに、台北で歓迎会、座談会、ラジオ放送¹⁶が行われるという旅行スケジュールが共通していた。最後に島の東側を旅行することもあったが、多くは台北から直接、基隆に向かい、帰途についた。台北周辺だけだったのは宮城の1回目のみで、台中まで、台南まで、屏東まで、全島一巡など、多くは中部や南部まで足を伸ばしていた。滞在期間は、短い場合で2～3週間、1カ月半程度が多く、2カ月以上に渡る場合もあった。滞在の延長や公演日の追加、曲目の増加等、現地での変更もみられた。

本稿で扱った演奏旅行は、稿末の図1に示した台湾の主要な各都市を網羅していた。各都市の演奏会場を稿末の表2にまとめたが、北部では、台北、基隆、新竹、東部では花蓮港、中部は台中、彰化、南部は台南、高雄、屏東であった。その他、各地域の製糖会社も会場となっていたので、末尾に記載した。このうち台北の警察会館は、1931年の落成直後から頻繁に使用されていた。劇場や公会堂が舞台となる一方で、学校の講堂も会場となった。花蓮港や彰化では、劇場は使われず、学校が舞台となっていた。

曲目については、基本的にはそれぞれの三曲家が得意とする曲目を演奏していたが、現地の三曲家との合奏も行われていた。神如道は、独奏の古典本曲の普及のために来台したが、演奏会では合奏曲も演奏した。中島も、演奏する予定ではなかったが、現地の尺八家との合奏を放送した。もともと合奏できる同伴者がいる場合でも現地の三曲家が加わることがあった。また、会派の会員が台湾で活動している場合、会員との共演も行われた。宮城の場合、来台した直後に練習が行われた上で演奏会が開かれた。以上のように、訪台した

三曲家は、一方的に音楽を聴かせるだけではなく、現地の三曲家と共同で演奏活動を行ったのである。

渡航の経緯については、台湾総督府から公式な要請を受けたことが分かるのは、宮城の1回目だけであった。それも、田邊尚雄や中村護の働きかけが背景にあった。吉田や神の場合、自ら総督府や警察等の官庁、教育界や財界の有力者に事前に依頼状を送った。そのため、個別の演奏会には、現地の三曲家の発起という形が取られていた。

台湾の受け入れ側の人物としては、基隆の中村護が宮城の旅行を斡旋し、台中の小川浄童が吉田や鈴木の案内役となり、三村馨南が上田兄弟を招いたことが分かった。他の旅行者の共通点としては、地元の尺八、箏三弦の師匠たちが、現地の案内、演奏会や座談会の手配、演奏会における助演等を引き受けていた。また、吉田、山口のように、設立されたばかりの協会の行事として招聘するという形もみられた。歓迎演奏会は、流派を超えて企画されることが多かった。

渡航の理由は、主に視察と普及であった。小野、吉田、中島は普及の目的が明白であった。上田や中は講習会や昇格試験を実施し、他の三曲家も各地で講習会を行っていた。自分の会員の状況を視察し、短期間に各地を周遊し、講習会や演奏会を数多くこなした。

4. 結び

本稿は、植民地台湾を訪問した複数の三曲家の旅行を取り上げ、その旅行の状況を考察した。その結果、三曲家の傾向、旅程の共通点、演奏会の開催、現地の三曲家との関係、渡航の経緯と理由について知見が得られた。

これまでの吉田と宮城の旅行についての調査から、台湾在住の日本人の招聘、製糖会社との親しい関係性、現地の友人や会員の協力、地元の会員との共演、短期間で多数の演奏会、講習会、ラジオ放送などの傾向が導き出されていた（福田

2018a, 2018b)。そのうち、全島巡演の旅や現地の三曲家との関係は、今回の考察結果とほぼ共通していたが、特に渡航の経緯や理由、製糖会社との関係性は、本稿で新たに明確になった。

渡航の経緯は、これまで台湾側からの要望が先立つと考えていたが、実は三曲家自身の自発的な旅行が多かった。しかし、総督府や関係先に依頼状を送ることにより、結果的に演奏会の企画や旅行の案内は台湾の関係者が受け持つことになっていた。台中の小川は、複数の三曲家に対して案内役を担っており、内地からの旅行のマネジメントに一定の方法が定着していたと思われる。渡航の理由については、視察と普及の目的が主であり、そのため、演奏会の他に講習会や試験も実施された。製糖会社については、吉田、宮城、鈴木、中島の旅行において関係性がみられ、新日本音楽を得意とする三曲家（表1のB）の共通点であったと指摘できる。

なお、三曲家の活動を調査する上で、台湾人の影はほとんど見られなかった。吉田と宮城は、台湾の音楽や原住民の生活に関心を持っていたことが伺えたが、その他は、日本人社会の内部での出来事としか見ることができなかった。今後、資料調査を進め、植民地における邦楽の意味するところを検討する必要があると考えている。

参考文献

【単行本、雑誌論文】

青木繁 1934「俊寛の作詞者を訪ねて(一)」『三曲』8月号 26-30.

東綾子 1935「私達のよろこび」『おとづれ』第3号: 20-23.

井口淳子 2019『亡命者たちの上海楽壇』東京: 音楽之友社.

上参郷祐康 1989a「川瀬順輔」*in* 平野; 上参郷; 蒲生: 620.

1989b「神如道」*in* 平野; 上参郷; 蒲生: 663.

1989c「中尾都山」*in* 平野; 上参郷; 蒲生: 707-708.

1989d「宮城道雄」*in* 平野; 上参郷; 蒲生: 748-749.

1989e「山口四郎」*in* 平野; 上参郷; 蒲生: 758.

木原彩竹 1933「台中通信 鈴木藤枝女史」『三曲』

3月号61-62.
 吉川英史 1962 (1997)『宮城道雄伝』東京：邦楽社.
 金志善；福田千絵 2016「1920年代の朝鮮における新
 日本音楽の展開—都山流尺八の佐藤令山の活動を中心
 に—」『韓国音楽史学報』Vol.56, 113-144. (原文韓
 国語) 1920년대 조선에서의 신일본음악의 전개—도
 잔류 사쿠하치, 사토 레이잔의 활동을 중심으로
 金田一春彦 1982『十五夜お月さん 本居長世 人
 と作品』東京：三省堂.
 台湾製糖株式会社東京出張所 (編) 1939『台湾製糖
 株式会社史』東京：台湾製糖東京出張所.
 石婉舜；頼品蓉 (著) 劉麟玉 (訳) 2018「ウェブサ
 イト「台湾老戲院文史地図 (1895-1945) の紹介」
 in『劉科研報告書』奈良：奈良教育大学教育学部、
 83-102.
 甲府市庶務課 (編) 1936『台湾博覧会と台湾地方状
 況視察記』甲府：甲府市.
 田中義一 1989『中尾都山の生涯』東京：ホーオー堂.
 月溪恒子 1989a「上田芳懂」in平野；上参郷；蒲生：
 600.
 1989b「谷狂竹」in平野；上参郷；蒲生：683.
 1989c「吉田晴風」in平野；上参郷；蒲生：767.
 都山流百年史編纂委員会 (編) 1998『都山流百年史』
 京都：都山流尺八楽会.
 徳丸吉彦 2004「表象としての日本音楽」in山内久明；
 柏倉康夫；阿部斉 (編)『表象としての日本—西洋
 人の見た日本文化—』東京：放送大学教育振興会：
 111-126.
 中島雅楽之都；吉田熙生 (編) 1996「台湾旅行記」『生
 誕百年記念中島雅楽之都隨筆集』東京：正派邦楽会。
 441-444. (初出1936年5月)
 南部憲正 1926「台南と尺八と私」『三曲』1月：60-
 61.
 平野健次 1989a「阿部桂子」in平野；上参郷；蒲生：
 591.
 1989b「小野清友」in平野；上参郷；蒲生：614.
 1989c「川瀬里子」in平野；上参郷；蒲生：620.
 1989d「中島雅楽之都」in平野；上参郷；蒲生：
 708-709.
 平野健次；上参郷祐康；蒲生郷昭 (編) 1989『日本
 音楽大事典』東京：平凡社.
 福田千絵 (FUKUDA, Chie) 2006「海外三曲公演の
 先駆け—初代中尾都山と米川琴翁夫妻のロシア旅
 行」『お茶の水音楽論集』特別号：215-226.
 2018a“The activities of the *koto* and *syakuhati*
 performers in Taiwan during the 1920s and 1930s.” in
 劉；徳丸；小塩；福田：39-41.
 2018b「本土音楽家の台湾演奏旅行—宮城道雄と吉

田晴風を中心に」in劉；徳丸；小塩；福田：66-75.
 藤田俊一 1962『吉田晴風の一生 附 尺八芸談』
 東京：日本音楽社.
 宮城道雄 (著)；内田百閒 (監修) 1957『宮城道雄全
 集 第一巻』東京：三笠書房.
 宮城道雄；吉田晴風 1951『琴と尺八』世界の日本社.
 山本華子・李知宣 2013「1910年代の朝鮮における
 日本の伝統音楽調査①—『京城日報』の記事を参
 照して—」『洗足論叢』第41号：61-69.
 林進發 1929『台湾人物評』台北：赤陽社.
 劉麟玉；徳丸吉彦；小塩さとみ；福田千絵 2018『科
 研費研究成果報告書 日本伝統音楽の越境—植民
 地台湾における「邦楽」の伝承』
 【雑誌・新聞・ウェブサイト】
 『三曲』1921~1944年、筆者蔵.
 『台湾邦楽界』1933年~1935年、中央研究院蔵.
 『台湾日日新報』1898~1944年、台湾大学蔵.
 『台湾芸術新報』1935年、国会図書館蔵.
 『臺灣老戲院文史地図 (1895-1945)』
<http://map.net.tw/theater/>
 (2019年12月12日最終アクセス).

註

- 1 「台中に於ける川瀬夫妻其他の三曲演奏会は、
 十六日午後六時より台中俱樂部にて開催されたる
 が、さすが我国における斯道第一級の名人だけあ
 つて、満場の聴者を恍惚たらしめ近來になき盛會
 を呈せり」(『台湾日日新報』1919年11月19日4面)
- 2 「台湾同好者發起にて目下本島漫遊中の斯道の
 大家川瀬輔氏夫妻を招待し十二月四日午後六時よ
 り基隆公会堂に於て三曲演奏大会を催す計画あり」
 (『台湾日日新報』1919年11月28日5面)
- 3 「当地斯界の同好者發起となり今回来遊の川瀬順
 輔氏夫妻一行歓迎の意味を以て来る二十六日(日
 曜日)午後二時より鉄道ホテル余興場に於て三曲
 演奏大会を催す由川瀬氏は東都斯界の名手とし
 て既に定評あるの人なれば当日は非常の盛況を呈
 す可し」(『台湾日日新報』1919年10月22日7面)
- 4 「既報せる如く台北における川瀬先生一行歓迎三
 曲演奏会は本日開催予定なりしも総督閣下御重態
 の由に付御遠慮申し同日の開會を延期し来る十一
 月八九両日(土曜及び日曜)午後六時台北鉄道ホ
 テル余興場に開催の事となしたる趣きなる」(『台
 湾日日新報』1919年10月26日7面)
- 5 次の3点の記事を総合した。「十月七日初京阪神
 の会を経て十月十日吉野丸にて渡台、台湾各地巡
 演 十一月十五日帰京の予定」(『三曲』1926年9

- 月号68頁)「十月九日神戸出帆渡台、台北基隆台中嘉義台南屏東高雄各所にて演奏会開催の由」(『三曲』1926年10月号72頁)「川瀬順輔師同里子師及び井村豊子氏 台湾巡演旅行を終へ先月末帰京」(『三曲』1926年12月号70頁)
- 6 「嘉義竹友会主催。台南新聞社後援。来三十一日午後六時。滞在嘉義座。■三曲演奏大会。歓迎川瀬順輔氏同氏夫人並豊子女史一行云」(『台湾日日新報』1926年10月21日4面)なお、■は判読できない文字。
- 7 「邦楽界の泰斗大檢校小野清友氏は台湾に於る邦楽視察の爲め来台したので台北の箏絃界有志発起となり二十三日午後六時半から同十時半迄本社三階に於て三曲演奏会を開催同好の士の参■を望むと」(『台湾日日新報』1925年5月23日5面)
- 8 両者についての詳細は不明。
- 9 「箏曲公開 基隆婦人会。愛婦分会。基隆音楽協会等。共同延来台中之箏曲名手宮城道雄氏。訂月之三十日午後七時。假基隆座公開演奏。会費白券二円。青券一円。赤券(学生券)五十銭云。」(『台湾日日新報』1935年7月23日8面)
- 10 「四日の午後二時から台中州青果同業組合事務所階上に於て満州行脚の講演を1時間半シャベリ続け尺八の方より此の方が大変な人気であつた」(『三曲』3月号62頁)
- 11 「九月五日台湾へ向つて出発十月上旬迄全島巡歴帰途福岡島根京阪神講習を終へて十月中旬帰京の予定」(『三曲』9月号70頁)「十三日台中に出発南部各地演奏後来月一日帰北十月九日前後帰京の予定である。」(『台湾邦楽界』13号22頁)「九月十日基隆上陸以来台湾総督府を始め各学校官署会社工場及民間方面へ公演講習多く十月十日帰京の予定は二十日以後に変更の由」(『三曲』10月号79頁)「同氏は南部懇望の地に予定を変更され八日発足東部行脚後来る二十二日帰京の予定である。」(『台湾邦楽界』14号22頁)
- 12 「九月十日来台。翌十一日本社小石原氏の案内にて総督及各局長に挨拶廻りをなしついでに台湾に於ける川瀬派長老今川恒二郎氏青木繁氏宅を訪問せり。」(『台湾邦楽界』13号22頁)
- 13 「翌日特に文教局長懇請により午後十二時半より総督府一階大食堂に於いて独奏会を開き」(『台湾邦楽界』13号22頁)「総督府庁舎第一階食堂に於いて神如道氏の尺八を聴く会を催されたが流石の大食堂も定刻前満員の有様で吹奏に先立ち王野社会課長の挨拶あり、神氏は吹奏曲のゆわれを説明しつつ左の曲目を独奏された。尚当日は安武文教局長始め府庁各課長連も多数来聴され最後迄妙演

に聴き惚れていた事は近来に稀に見る場面であつた。」(『台湾邦楽界』13号23頁)

- 14 「神如道師中川総督官邸に招待さる 来台中の神如道師は五日総督官邸に招聘され佐藤晴美師同道本曲を吹奏された。当日は中川総督を始め府内局課長、野口知事直轄学校長、愛婦々人連の来聴あり盛会であつた。」(『台湾邦楽界』14号22頁)。
- 15 「神如道謹聴会は十月六日美風会主催にて銀玲会及谷狂竹氏の応援を得て盛大に催された何分来聴者が真面目に聴く会であつただけ気分満点であつた。盛況裡に十時閉会した。」(『台湾邦楽界』14号22頁)
- 16 台北放送は、以下の5件。1931年6月28日吉田晴風、1933年10月25日吉田晴風、1934年3月19日山口四郎、1935年8月12日宮城道雄、1936年3月8日中島雅楽之都。

[付記] 本稿は、JSPS科研費18K00128による研究成果の一部である。また、旧字体を新字体に改めた。

図1. 演奏旅行先の都市 (福田作成)

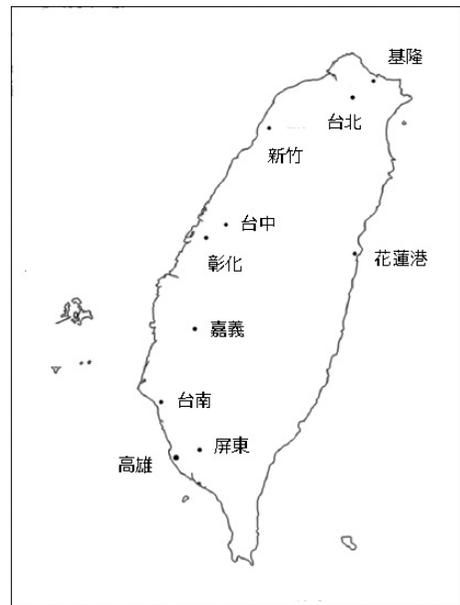


表2. 内地の三曲家が使用した演奏会場(福田作成)

○台北

鉄道ホテル余興場	1919年11月8～9日 川瀬夫妻 1924年1月16～18日 宮城道雄
警察会館	1931年6月6日～8日、27日 吉田晴風 1933年2月15日 鈴木藤枝 1933年10月26日～29日 吉田晴風 1934年4月9日 山口四郎 1934年10月7日 神如道 1934年11月23日 山口四郎
栄座	1935年7月27日及び28日 宮城道雄
京楽座	1930年2月18日 上田芳憧・竹童
台湾日日新報社3階	1925年5月23日 小野清友
台北市博覧会第二会場(新公園)	1935年11月23日 山口四郎

○基隆

基隆公会堂	1919年12月4日 川瀬夫妻 1934年3月又は4月 山口四郎 1935年11月11日 山口四郎
基隆座	1924年1月13日 宮城道雄 1931年6月24日 吉田晴風
基隆劇場	1935年7月30日 宮城道雄

○花蓮港

花蓮港小学校	1933年10月31日及び11月1日 吉田晴風
---------------	-------------------------

○新竹

新竹座	1931年6月11日 吉田晴風
新竹公会堂	1933年2月13日 鈴木藤枝 1934年3月か4月 山口四郎
新竹小学校	1933年10月24日 吉田晴風

○台中

台中倶楽部	1919年11月16日 川瀬夫妻
台中座	1933年2月3日 鈴木静枝
娯楽座	1935年8月1日 宮城道雄
新富小学校	1933年10月3日及び4日 吉田晴風 1934年4月15日 山口四郎

○彰化

彰化女学校	1931年6月23日 吉田晴風 1933年10月21日 吉田晴風
豊原小学校	1933年10月21日 吉田晴風

○嘉義

嘉義座	1926年10月31日 川瀬夫妻 1935年8月6日 宮城道雄
嘉義公会堂	1931年6月19日 吉田晴風 1933年10月16日 吉田晴風

○台南

台南劇場	1931年6月18日 吉田晴風
台南公会堂	1925年5月16日 小野清友 1933年10月14日 吉田晴風
宮古座	1935年8月3日 宮城道雄

○屏東

屏東座	1926年11月6日 川瀬順輔夫妻 1931年6月21日 吉田晴風
末広座	1933年10月5日 吉田晴風 1935年8月5日 宮城道雄
屏東女学校	1933年10月5日 吉田晴風
屏東小学校	1933年2月11日 鈴木藤枝 1933年10月5日 吉田晴風
恒春小学校	1933年10月8日 吉田晴風

○高雄

高雄館	1931年6月20日 吉田晴風
青年会館	1935年8月4日 宮城道雄
高雄女学校	1931年6月20日 吉田晴風

○製糖会社

台湾製糖		
旗山工場	1933年10月7日	吉田晴風
東港工場	1933年10月8日	吉田晴風
後壁林工場	1933年10月9日	吉田晴風
橋仔頭工場	1933年10月11日	吉田晴風
車路乾工場	1933年10月12日	吉田晴風
三嵌店工場	1933年10月13日	吉田晴風
湾里工場	1933年10月15日	吉田晴風
塩水港製糖		
岸内工場	1933年10月18日	吉田晴風
新営工場	1934年3月又は4月 1935年8月9日	山口四郎 宮城道雄
明治製糖		
麻豆工場	1933年10月19日	吉田晴風
	1935年8月7日	宮城道雄
南靖工場	1933年10月20日	吉田晴風
南投工場	1933年10月22日	吉田晴風
浚湖工場	1933年10月23日	吉田晴風
大日本製糖		
虎尾工場	1934年3月又は4月 1935年8月8日	山口四郎 宮城道雄

